
空の彼方、

水面 幸陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の彼方、

【Nコード】

N3297I

【作者名】

水面 幸陽

【あらすじ】

ファンタジーだけどファンタジーじゃない。
恋愛だけど恋愛じゃない。
矛盾した世界を生きる17歳の高校生の物語。

空の彼方、

窓から差し込む日差し。

若干水滴の張り付く両開きの窓を開け放ち、強い光に目を細める。
ずっと。遠い空。

台風一過の真つ青な空。

季節外れの11月の台風は、ちょっとだけ季節に反抗しなかっただけなのかもしれない。

何事もなく。少しだけ激しい雨と一緒に。

それだけに静かでおとなしい台風だった。

とりあえず今日も平和な朝だった。

「おはよう」

「ああ」

ガラステーブルを挟んで新聞を広げた親父と向かい合って座る。

そこには俺のための朝飯とコーヒーと弁当が用意してあって、親父は既にスーツ姿だった。

「コーヒーをずっと……と飲む俺がボーっとテレビのニュースを見ながら、」

「台風大したことなかったな」

「そうだな」

「屋根とか大丈夫だった？」

「さっき家の周りを見てきたが問題なかった」

「ならいいや」

朝の親子の会話、終了。

と同時に親父は新聞を折りたたむと、会社の鞆を持って、

「じゃあ行つて来る。今日は遅くなるぞ」

「はいよ。夕飯は？」

「接待だから食ってくる。冷蔵庫にあるもんで適当にやっつけ」

「了解」

俺はテレビから目を逸らさずに答える。

正直、親父と目を合わせるなんて行動はここ2年間ほとんどしていない。

嫌いとかそんな感情じゃなかったし、親父も何も言っていない。

よって意識することでもなかった。

親父が背をこっちに向けたのを気配で確認して、

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

だからきつとこれは問題のあることではないんだ。

ドアの閉まる音。

この時点で午前7時30分。

俺が家を出て高校に行くまでは15分。

ホームルームが始まるのは8時00分。

つまり、俺には毎朝10分の余裕があった。

顔を洗って、制服のブレザーに袖を通し、鞆に弁当を放り込む。

この間5分。

それが終わってから俺はリビングの隣の和室に鞆を持ったまま移動する。勿論テレビの電源は切って。

和室の一番奥。半畳ほどのスペースを占領する仏壇。

「今日も……一日が平和でありますように」

その前に膝をついて毎朝、5分間俺は手を合わせ目を閉じる。

もはや習慣になっており。

一種の儀式みたいなものだった。

仏壇の上には写真が飾られてあり、そこにはまだ若き日の母親。

仏壇の上には置物が置かれており、そこには生まれるはずだった弟の名前。

母親と弟が死んでから4年。

俺はこの挨拶を欠かしたことがなかった。

「じゃあ……」

5分が経過する。

鞆を持って立ち上がった。

「行ってきます」

電気を消して。

一歩外へ。

二人で住むには多少贅沢な家でも外から見たら小さく見える。

当たり前だ、本当は4人で住むはずだったのだから。

錆がところどころ付いた自転車を引き出し、水滴を拭き取ってから跨る。

外に向かって大きく足を踏み込んだ。

商店街を抜ける200メートルぐらいの長い下り坂。

民家とか八百屋とか魚屋とか服屋の背の低い家に混じって、青い空が広がっている。

そら。

見上げた先には何が広がっているのか。

鴉が1羽、向こうの方で羽ばたいた。きっともっと遠くに行くのだろつ。

遠い遠い空の彼方に。

遠い遠い空の彼方に。

遠い遠い空の彼方に

遠い遠い……

空の彼方、（後書き）

これで連載二つ目です…（汗
他のは若干違った雰囲気になりますが、そこらへんも含めて精進
したいと思います。

でも他の作品でもコメントはないですが結構来てくださる方がいる
ようなので、それなりに頑張って、やっていきます。では

日常、

実際、俺には学校なんてどうでもよかった。

だから数少ない友人の意見に耳を傾けるのも別に大した問題じゃない。

授業なんて教科書の文字列をそのまま黒板に教師が写すだけの作業。さらにそれを俺たちがノートに写す。教科書を読み、理解し、覚えること。これが目的ならば授業を聞く、と言うのはただ無駄な時間ではない。

なるほど、それも一理あると思った。

だが、つまるところその友人は授業をサボりたいだけなのだ。

回りくどい友人のためにも俺は『サボリ』を提唱した。

友人は快く、だけどちよつと後ろめたそうな感じに、「ちよつとだけだからな」などと言いながら鞆を持って下駄箱に向かった。

ちよつとだけなら鞆を持つ必要などあるまいに。

と、移動したのはとある有名ファーストフード店。

昼前……と言うかまだ9時過ぎなので人影もなく、ほぼ貸切状態の店でドリンクとポテトだけを頼んで奥の方の見えにくい席に向かい合って座った。

それから友人の世間話が始まり、何故か変な方向へ話が曲がりだすのは1時間後。

「で、俺は思ったわけよ。学校でサボリと言ったら屋上、そうすると学園一の美少女がそこに立っていて俺に告白。だが俺は少し迷うフリをするんだ、ここが大事だぞ？そう、迷うフリをすることで彼女を精神的に駆り立て……」

「お前の妄想を話すのはいいが俺はそろそろ帰るぞ」

「ちよつ……そんなこと言うなって。悪かったよ、でも少しぐらい俺にも春が欲しい！俺の人生に潤いを！華を！」

「1つ、的確なアドバイスをやるとしよう。屋上の鍵は学校側で管理している。」

「俺ピッキング2段なんだよね」

「……もしもし？警察ですか？」

「おいそれはちよつと洒落にならな……」

「安心しろ、ちゃんと匿名で通報するから俺に迷惑はかからない。」

「その心配じゃねえよ！」

「冗談だ」

「今は本気で焦ったぞおい……」「あのー……お客様……？」

二人が同時に通路側を見やると、ファーストフード店の男性店員がこちらを見ている。

【仲間にしますか？】

【はい】

【いいえ】

……じゃなくてだな。

「なんででしょうか？」

「いえあの……そう騒がれましたは他のお客様のご迷惑に……」

「客いねーじゃん」

「お前は黙ってる」

ボソツと、だが店員にも聞こえるような声量で友人が言うのを俺は頭から文字通り腕力で押さえつける。本当に空気の読めない奴だ。

「ええと……ですね、あの店長が嫌い嫌い……と」

……ん？店長……が？

「なんだ。要するに喧嘩を売ってきてるわけだ。いい度胸俺が……ふべっ」

「ああすいません、今から気をつけますので」

もう一度頭を押さえつけて、スマイルスマイ……

「おい！お前店長が嫌いとかそんな聞こえるわけねーだろうが」

「おいはお前だ。2度とここに来たくないのか」

「ああ？何わけわかんないこと言って……」

「こいつはこつちで抑えときますんで。すみませんでした。」
軽く頭を下げて謝罪。俺は友人と違って場所をわきまえるし、ちゃんと礼節も重んじる。

別に悪いのは店じゃなくて俺たちなんだから。

「いえ……分かってくださったのならいいです。ごゆっくり」
店員もこちらに一礼。

威嚇するような態度の友人も店員が去るとおとなしくなった。
また店内には静寂が訪れる。

「で？なんであそこで引き下がったんだよ」

「お前知らないのか？ここの店長の噂。」

「噂あ？お前駅前の7不思議でもあるまいし……」

「いや、なんか昔この店にヤクザが来たことがあったらしい」
その話はこんなものだった。

今から一年ほど前のこと。

この店が完成すると共に店長となった人はなにかと怖くて、一言で言うところ『ヤクザっぽい』人だったららしい。

そんで事件が起きたのはその2カ月後。

元団員（なんのとは言わない）だった店長に対しケジメだのなんなので10人ぐらいの刃物を持った怪しげな人が店に入ったのだが、問題はその後。

目撃者によると熊のようにでかい店員が笑顔でその10人を迎えてこう言い放った。

「スマイル0円、水0円。ですが刃物のお持込はお断りしております。」

と、だ。

そしてその瞬間にはもうでかい店員の手の指の間には10本の刃物が納まつていたらしい。

勿論そのでかい店員が店長なんだが……。

そしたら10人は一人、一人と逃げ出して後には笑顔の店長が残っ

たそうな……

「……ってそれなんのホラーだよ」

「ホラーでもフィクションでもなくただの実話な。」

「いやいやいやだってそれ人間じゃなくね？」

「だからこの店長は怖いんだって」

「ぬう……」

おお、脳の少ない友人が珍しく考え込んでる。

流石にこんな話を聞けばやたらと騒ぐこともあるまい、店にも迷惑がかからなくて平和なサボリが……

「よし、じゃあ賭けよう。」

「はあ？」

友人はついに脳が無くなってしまった様だった。少ない脳も今ので蒸発してしまったか。

「俺が店長に喧嘩を挑む。勝ったら俺に1万な。負けたらお前に1万」

「お前勝てるわけもねえだろ……」

俺が呆れたそぶりを見せるも、効果なし。

フンっ、フンっといつももの喧嘩前の興奮状態に入ってて、もうどうにもなれ状態。

あまり友人の勞しい姿はみたくないのだがこれも1万円のため。

「いってらっしゃい。」

「いってく……うぬあ！」

席を立てて通路に出た友人の前を大きな壁が塞いでいた。

いや、正確には壁じゃないのだが……転がって頭を打った友人は突然のことで目を白黒させていた。

「なんだ小僧、俺に用があるんじゃないのか？」

「いてて……なんだこのでかぶつは」

「俺が店長だ。毎度ご利用いただきありがとうございます……」

「先手必勝！」

なんと。

この壁が店長とわかるなり友人は右ストレートをその腹に叩き込んだ。

……はずだったのだが何故か転がってるのは友人。

「ぶあっ……いてえ！」

そして出した右腕じゃなくて鼻を押さえている。何故？

「なんだお前素人じゃねえか。まったく余計なこととして寿命縮めんじゃねえぞ」

興味なさげにふう、とため息をした壁……もとい店長はそのそと店の奥に引っ込んでいった。

2メートル以上は確実にあった店長のいた空間は、彼が消えるともはや違和感さえ感じる、それほど存在感があった。

「ってかお前もいつまで転がってんだよ」

ゲシ、と蹴りを入れるも呻いたまま動かない。

面倒くさいので放置することにした。うん、帰ろう。

本日も平和、平和。

ただ帰ってから携帯の着信履歴を見たときにビビったのは幼馴染からのメールの着信件数。

『こら！もう授業始まつてるよ？』

『ねえ、寝てるなら早く起きなよ』

『どうしたの？体の調子でも悪いの？』

『ちよつと！先生に確認したら朝は来てたんじゃない！』

『学校終わったら家に行くからね！覚悟しておきなさい！』

……もうちよつと出かけて来たほうがいいのだろうか。

そう思案しているところに

ピンポン 鉄拳宅配サービスですっ！

本日も平和。うん、平和。

崩壊、

起床。

朝7時15分と言つとても、とても健康的な目覚めだった。とても健康的だった。(大事なことなので2回言った。)
で、いつも通りの朝を過ごし。

いつも通りに家を出た先、ヒナは玄関で仁王立ちしていた。

「おはよう」

「おはようございます姫」

ヒナはフンっ、と鼻息を立ててそれから俺の横に並んだ。
たまに突然。こうやってヒナは俺と学校に行く日がある。

『幼馴染』

とある種のゲームや小説だと、主人公と幼馴染が結ばれるのはほぼ必然、らしい。

それも俺が今まで読んだり見たり、そうしてきた経験の中で。
だから必要以上に俺はヒナに冷たく接していた。それに間違いはないと信じて。

そう、ヒナは俺みたいな奴と結ばれたりする必要なんかないんだ。
でもそれは俺のミスだった。

何かとヒナに辛く当たる俺に対してヒナはよく分からない勘違いをしたらしい。

余計に俺に構うようになったヒナに対して俺は思考しない事を決めた。

ああ。それでよかったんだ。

干渉しない、それが一番だったんだ

そんなことを考えながら俺は宙を舞った。

骨の軋むピキピキとした音が先、ヒナの悲鳴が遅れて聞こえる。理解した。俺は車に撥ねられたんだと。

走馬灯つてもんじゃなかった。

今までの記憶が一瞬で脳を駆け巡る。

小さい頃にヒナに貰ったお菓子を排水溝に落として泣いたこと。

慰めてからもう一個くれようとしたヒナの手を叩いて帰ってしまったこと。まだ謝ってないな……これ。でもヒナの家のポストにお菓子入れといたからおあいこだろ。

小学校の頃に男子に父親のことδειじめられていたヒナを見捨てて帰ったこと。

ヒナはこっちを見てたのに俺は知らん振りをしていた。その後あいつらの後をつけて全員ボッコボコにしたけど。ヒナは知らなかったはず。

中学校の頃に修学旅行でヒナのことを無視し続けたこと。

クラスの男子に何かあるたびに夫婦、夫婦と囁し立てられるのはうんざりだった。ヒナもそうだろうとそういうイベントのありがちな修学旅行だけは避けてた。ヒナはどう思っていただろうか。

地面にドシャリ、と俺は投げ出された。

ブレーキ音。おっせえよ運転手……

近所のおばさんとか出勤中のおっさんとか皆こっちを見ている。もう頭が追いつかない。

ヒナがこっちに走ってくる。

痛いともう感じなかった。

ヒナが泣きそうな顔をしていて、それでもって救急車を讀んでるっばいお婆さんの顔も真っ青だった。

俺はかなりヤバい状態なのかもしれない。

指の一本も動かない。

おーけーおーけー。

これで俺が死ねばヒナも幸せ街道まっしぐらじゃん。

「……………あ……………、な」

じゃあな、って言ったつもりなんだけどなあ。

暗転。

めのまえがまっくらになった。

なんだ……………結局俺ヒナのこと好きだったんじゃない

崩壊、（後書き）

ちよいと更新遅れてすいません。
次は年明け……かな

落下、（前書き）

（´・`・´）（すみません本当にすみません時間ないんです本当に
ry

なんだかんだでメインのローズマリーのほうがアクセスの伸びがい
いって言う…

いや続けますよ…多分…

落下、

ああ……俺死んじまったのか。

最後にヒナの顔見れてシアワセだったなーとか思う暇もなかったな。死ぬってこういう感じなんだ。

うん。

まあ悪くないか。

物凄く唐突だったけど未練とか、もう無いしな。

親父はどう思うだろうか。

いつも俺と関わらなかつた親父がどんな顔するかちょっと見てみたかったけど。

あ、それと友人Aもまだ俺死んだの知らないだろうな。

知ったらどんな顔するか……まあサボリ仲間一人減ったぐらいで涙するようなヤツでもなかつたけど。

俺は天国か、地獄か。

特にカミサマ崇拜してるわけじゃないけど……あれ？天国地獄は仏だっけ？

天国だつたら母さんいるかな？

ああやべ……どうせ母さんに会うんなら美容院行つとけばよかった

……

……、天国にも美容院あるか？

なんか物凄いだるいな。

浮遊感つてえの？

真っ暗で何にも見えないのに感覚はあつて……

ゼラチンの粘液の中に沈んでいつてるみたいだ。いや、沈んだことないからわかんないけど。

多分これが死ぬってことなんだろうな。

とてつもなくしんどいけど。

もうとんだけ時間が経ったかわかんない。

ずーっと暗闇の中。

体のどこも動かないし。

俺は死んでないのか？

意識のある植物状態？！

……日本初…… かもしれん。

「シューイチ……」

声が、聞こえた。

真っ暗な、右も左も上も下もわかんないような真っ暗闇。

でも、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「シューイチ」

俺か？呼ばれてるのか？

声は女みたいだけど、でもヒナほど大人びてない。むしろ子供の声。
女の子の声。

「シューイチはまだ、生きてるよ？でもなにもないだけ。」

生きてる？

俺が？

何も無いって何が？

「人間としての機能、全部無くなっちゃったの。だからもう人間じゃないの。でも安心して、もうこの世界に未練はないんでしょ？私
が。私がシューイチを連れて行ってあげる。」

人間……じゃなくなつた？

俺はまだ考えたりできるのに？生きてるのに人間じゃない？

この世に……未練がない？

じゃあ差し詰め俺に話しかけてきている子は……天使？

「天使じゃないよ。でもシューイチを助けてあげることができる。
悩んでたんでしょ？苦しかったんでしょ？彼女。今もシューイチの
隣にいるよ。邪魔だよな？だから……救ってあげるの。こんな世界
もういらないでしょ？」

その言葉は。

人間じゃないとかそんな言葉よりもっと深く。体に染み渡った。

未練は無い。

だけど、ヒナが……邪魔？

でも……俺が行ったら死ねるのか？

今度こそヒナの前から消えられるのか？

「うん じゃあ行こっか？」

返事を待たずして。

俺の体は崖から飛び降りたかのように落ちて……落ちていくようだ
った。

風は感じないが、何も見えないが感じる。

実はこれ地獄行きだった。

そんなこと考えたけど先にヒカリが見える。

小さい、小さいヒカリ。

これで、俺は開放される。

加速、加速、加速。

一瞬、ヒナの顔が頭を過ぎった。

狭い、白い病室で寝ている俺の隣で小さい椅子に腰掛けて俺を見下
るすヒナ。

枕もとの机にはヒナが持つてきたんだろう鮮やかな花が生けられて
いて、ヒナは制服だった。

死んだように眠る俺は目も開けない。当然だ。

時計の針がカチリ、カチリと動く度にヒナが今か、今かと俺が目覚
めるのを待っているようだった。

痛い。

胸の奥のほうで針で突いたような痛みが走る。

でも、戻れない。

ヒナの邪魔は出来ない。

加速、加速、加速。

俺は

ヒカリに到達。

そして意識を失った。

そう思った次の瞬間には目が覚めていた。

「なん……だここは？」

そこは見知った通学路や自宅の部屋とか病院とかそんなものから全然離れた。

まるで違う世界に来てしまったかのような。

見る視界全てに風になびく草原が広がっていた。

ここが……あの子の言っていた場所？

現実……なのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3297i/>

空の彼方、

2010年11月22日20時33分発行